

時間・死・永遠の命

大塚 稔

Time, Death, and Everlasting Life

Minoru OTSUKA

I

上智大学のアルフォンス・デーケン教授は大分以前から「デス・エデュケーション」を唱道されております。そのためか最近では、臓器移植や末期癌患者の安楽死・尊厳死に絡んで、マスコミでも死の問題が話題にされはじめておりますが、欧米ではかなり以前から教育現場でそのような科目(死学)が既にとりいれられていると聞きます。日本では死を正面切って話題にするのは、大人気ないという雰囲気もあり、ハイデガーの「死への存在」というような人間存在の分析にも、青年の未熟さ、青くささを感じる大人が多いようです。避けられない事実をとにかく言うなという思いがあるのでしょう。このような一種の諦観から、死を当然の事実として受け入れている大人はそれでもいいのですが、最近ではそのような大人が少なくなって、どちらかと言うと見たくないもの、おぞましいものはできるだけ見ないで過ごそうとする消極的な大人が多くなっているような気がします。これでは、青くさい青年の方がまだましかもしれません。いずれにせよ死は避けられない事実です。せっぱ詰まる前に何らかの用意はしておく必要があります。新たな死の解釈が生の実践につながればと考えております。

時間の問題から始めることにしましょう。と言っても、これだけで相当の事柄を論じることが可能です。ここでは時間を、熱力学の第二法則であるエントロピーの法則に関する一つの解釈として簡単に触れておきます。これが私たちの日常の時間感覚にかなり近いからです。一般に時間は過去から現在へと流れているように感じられます。つまり時間は決して逆戻りしないという感覚です。これをいくらか物理的に表現すれば、次のようになります。今一滴のインクをコップの水に落とします。この一滴のインクは徐々に周囲に拡がり、青いインクであれば水は少しずつ青くなって行くはずですが、これは、そのままでは二度と元の一滴のインクに戻ることはありません。このような出来事の一方向の流れを、時間に移すと、その出来事は、二度と戻らない時間ということになります。時間が非可逆だというのはそのような意味です。

これを痛切に感じるには、相当の年齢になる必要があるだろうし、またかなり特殊な状況におかれる必要もあるかも知れません。人間は、自らの生命が有限であること、いずれ必ず死が訪れることを自覚できる存在でもあります。これは生き物の中にあっては人間だけが感じることでできるものでもあります。この事実を踏まえた上で、時間論に大きな影響を与えたアウグスティヌスの時間

論を少し取り上げてみましょう。彼はどのように過去、現在、未来を捉えたのでしょうか。

ローマ帝国の支配下にあったアフリカのカダステという町にアウグスティヌスという有名な神学者が生まれております。その名はおそらく聞かれたことがおありでしょう。彼は『告白録』という書物の第11巻に有名な時間論を述べています。それには「未来も過去もない。厳密な意味では、過去、現在、未来という三つの時があるとも言えない。あるのは、過去についての現在、現在についての現在、未来についての現在、だけである。そしてこの三つの時は、ただ魂の内にのみある。過去についての現在とは記憶であり、現在についての現在とは直観であり、未来についての現在とは期待である。未来であるものが既にあるとか、過去となったものがまだあるなどと思ってはならない」とあります。これだけ読めば「ある」と言えるのは現在だけのように読めます。なぜなら過去は「あった」としか表現できないし、未来は「あるであろう」としか表現できないので、「ある」と言えるのは、現在だけのように思えるからです。しかしその先を読んでみますと、「私たちが本当の意味でく時がある」と言えるのは、まさしくそれがくない方向に向かっているからであるとも書いております。ということは、現在は、常に既に存在し終えて目前から消えてしまった過去のうちにその都度消えつつあることとなります。これでは、日常の私たちの意識にあるような、現在に拡がりを感じる事実が表現できません。なぜなら目前の出来事は、全て過去と未来に分割されるので、外にある出来事をいくら分割しても、私たちが感じているような時間の拡がりを捉えることができないからです。そこで彼は、単一な分割できない精神の方にその拡がりを認めようとしたわけです。

このアウグスティヌスの時間論は大変興味深いものですが、現在を精神の拡がりに還元してしまっているのはどう見ても観念的でありすぎます。「ある」と言えるのが現在だけであって、しかもその現在が絶えず消えつつあるのだとすれば、そしてそれでもその移り行く現在だけにしか関心が持てない人がいるとすれば、彼は、実に儂いものを求めていることとなります。事実、アウグスティヌスの時間論には、そのような側面があると思われれます。

しかしどうでしょう、例えば過去を取り上げますと、それは単に「あった」とだけしか言えないものでしょうか。夜空に見える星は、その光が地球に達するまでには何千、何万光年もの時間がかかっていますし、既にその星は存在しないかもしれません。しかし私たちは、その星の光を現在目にしていると感じております。また雷鳴とその閃光の間には、距離に応じて時間にいくらかずれがあります。周囲の事物も、厳密には、それに光があたって私たちの目にまで届くには、いくらか時間がかかっているはずですが、音速や光速には速度の上限があるからです。ぼんやりと同時的な出来事と思っているものも、実はこのように時間にずれがあります。もしそうなら、過去は、単に記憶の中にしか存在しないとは言いきれないのではないのでしょうか。私たちが目にする出来事は、そういう意味では、全て過去にあるものだとも言えなくありません。これをここでは、過去の実在性というように表現しております。

また現在が単に精神の拡がりなどでなく、出来事の拡がりであることは、既に物理学では常識になっております。時間と空間があって、その中に出来事があるというのではなく、出来事が時間と空間を生み出していると言われます。出来事のないところには時間も空間も存在しないのです。

現在は出来事の拡がりであって、その出来事は過去から現在へと一方向に流れていること、そして流れ去って存在しないかのように思われる過去も、実は実在するのだと言うこととなります。過

去は、事実となって永遠に変更のできないままとどまり続けるのです。こう考えると、過去から現在に流れる時が、累積して積み重ねられているというようなイメージが持てるはずです。つまり過去が既に消えてなくなってしまうというのではなく、実在するものとして残されながら、新たに現在がそれに積み重ねられて行くというイメージです。現在は可能性です。人類は、その可能性を生かしながら、これまでそういう積み重ねられてきた時間の上に、文化を築いてきたのです。

このように考えると、現在に生きる私たちにもそれなりの責任があるはずで、動物はおおよそ生き方を知って生まれてきますが、人類はほとんど生き方を知らずに生まれてきます。ということは、それぞれが自らの意志と力で、それを学び取る必要があるわけです。

II

次に死の自覚と不死への願望を見てみましょう。人間は、これまで様々に定義づけられてきましたが、今日の話では、人間は、「死を自覚できる存在」だというように考えておきます。犬や猫が、高いところからおそろおそろ下を見下ろしている姿をよく見掛けます。ライオンに追われた小動物が必死になっている姿もテレビなどでよく目にされます。彼らにも何らかの恐怖心はあるようです。しかしその恐怖心はおおよそ目の前のその場限りの恐怖心であって、恐怖をさそう状況がなくなれば、まったくけろっとしております。少なくとも私にはそのように見えます。しかし人間は違っております。いずれ自分が死ぬこと、しかもそれが必ず訪れることを知っております。この避けられない、例外のない事実を、人間は知っております。これが、時にはいい知れぬ不安を呼び起こすことになります。

パスカルは人間存在のこのような事実を痛切に捉えました。『パンセ』にはこうあります。「ここに幾人かの人が鎖に繋がれているのを想像しよう。みな死刑を宣告されている。その中の何人かが毎日他の人たちの目の前で殺されていく。残った者は、自分たちの運命もその仲間と同じであることを悟り、悲しみと絶望とのうちに互いに顔を見合せながら、自分の番が来るのを待っている。これが人間の状態を描いた図なのである」。また彼は、人間の最後をこのようにも書いております。「この劇は他の部分ではどんなに美しくても、最後の人幕は血みどろなのだ。最後には頭から土をかぶされて、それでもう一巻の終わりである」と。ぞっとするような描写です。

このような想いは洋の東西を問いません。例えば原始仏典の一つ『スッタ・ニパータ』にもこのような言葉が見られます。「若い人も壮年の人も、愚者も賢者も、全て死に屈してしまう。全ての者は必ず死に至る。彼らは死に捕らえられてあの世に行くが、父もその子を救わず、親族もその親族を救わない。見よ、見守っている親族が留めどもなく悲嘆に暮れているのに、人は屠所に引かれる牛のように、一人ずつ連れ去られる」。

このような死への恐怖が不死を願う強い衝動を持たせることになるのは、ある意味では当然のことだったでしょう。不老不死を願う物語は世界中にあると聞きます。肉体は無理だとしてもせめて魂だけでもという願いが、種々の冥界譚を生み出しました。そしてこの世の悲惨を味わい尽くした人間たちは、更にこの世の悪や不正がどこかで償われるべきだと考えるに至りました。それが天国や浄土の思想です。

いま述べましたような死後の生については、日本人も極楽浄土などと呼んで、比較的身近に感じている人も多いでしょう。数年前に「大霊界」というような映画も話題になっておりました。蓮の

花の咲き乱れる極楽のイメージは、よく知られております。また臨死体験などもいくらか興味本位にマスコミがよく取り上げる話題です。しかし臨死体験というのは、どこまでも臨死、つまり死にかかった人の体験であって、死んだ人の体験ではありません。死んだ人には何も語れません。靈魂不滅を説いても、死後にどうなるかというのは実際のところ何も分からないのが実情でしょう。

しかし科学的にもものを考えようとする人たちは、なによりも経験を大切に考えようとし、理性が納得できない事柄、合理的に解釈できない事柄は、一般に存在しないものとするのが普通です。そのような人たちは、死後の生についても、霊のようなものについても、当然存在しないと考えます。更にこれが極端になれば、魂なども存在しないと言う人までいますし、宗教のような不合理な学問などには何ら理解を示さない人もおります。

死後の生を信じないでいいような、あるいは死後の生について何も語らないような宗教というのは、宗教の名に値しないとされます。確かに死後の生を信じればこそ、あの世で、懐かしい人に会えると思えるのだろうし、またこの世の苦しさから解放された苦痛のない生活を思い描くこともできるのでしょう。この気持ちは、心情的には十分に理解できます。しかしこの種の感情は、何の根拠もない単なる願望の現れでしかありません。むしろそのような出会いや解放など存在しないとする方が理に適っております。茶毘に伏された遺骨には、感覚や思考、運動を司る大脳は存在しません。勿論、肉体も存在しなくなっております。これで何を求めよというのでしょうか。

そういう意味での不死性は考えることはできません。しかしだからと言って、死後には一切が消えてなくなり、自分が生きてきた過去の人生の意味までが全て無に帰すると考えるのは極端でしょう。果たして、死後の生を否定しながら、それでも宗教的であることは可能でしょうか。これが可能であることを示すのが本日の大きなテーマです。そのような方向を目指した一つの具体例として、岸本英夫博士の生死観を紹介しますが、これは、岸本博士ですら、まだ理論的には不十分なところがある点を指摘するのが目的であります。そういうつもりでお聞きください。

III

岸本英夫という学者は、有名な宗教学者ですからご存知の方もおられるかも知れません。彼は、皮膚癌に冒されながら10年間闘い続け、1964年に亡くなりました。彼の論文は、『死を見つめる心』<講談社文庫>に収められております。その巻頭論文「我が生死観」に、次のような一文が見られます。「私は実は、子供の時には、敬虔なキリスト教の家庭に育った。私自身も子供らしい熱心な信仰を持っていた。しかし青年時代に、私は奇跡を行うことのできるような伝統的な人格神信仰は、どうしても信じることができなくなった。その意味で、神を捨てたのである。そして同時に死後の理想世界としての天国や浄土の存在は、まったく信じないようになった。そしてしだいに私は、肉体の死によって、私という意識する個体は、物質的にも、精神的にも、解消するものと考えてようになってきている。そう考えているというよりは、むしろ、私の近代的な知性が、私をして、そう考えさせずにはおかないという方が、より正確であろう」と。

これには、知識人一般の悲劇が端的に物語られております。何もここまで考えなくてもと思われるかも知れませんが、それが、知識人に共通の業とも言える感情だと考えてください。知性が納得しない。このひとことによって彼は、天国も極楽浄土も、靈魂不滅も、全てを放棄してしまったのです。

通常なら、たとえ以前にどれほど知性にこだわっていても、癌告知後には、改心して、神にすがりたく思うのが心情でしょうが、彼の場合、死後の生を信じないという点では、癌告知以前と以後とに大きな変化は見られません。しかしその彼の生死観には、確かに、理論的にも、心理的にも微妙な変化がありました。まず癌告知以前の論文と以後の論文を取り上げながら、彼の生死観と、その微妙な変化を見て行くことにしましょう。

癌告知以前に発表された代表的な論文は、「生死観四態」という論文です。これは、昭和23年に発表されておりますが、そこで、彼は生死観の由来を次のように述べています。「人間の生に対する執着、どうしても死なねばならないという事実、死後の運命の不可知」この三つの事実が、様々の生死観を生んだのだ」と。そして様々の生死観を類型的に整理すれば次の四つの形態に分かれると言います。

- (1) 肉体的生命の存続を希求するもの
- (2) 死後における生命の永存を信ずるもの
- (3) 自己の生命をそれに代わる限りなき生命に託するもの
- (4) 現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの

順次その内容と彼の見解とを整理して行きましょう。

まず(1)は、肉体的生命が死後にも存続することを願う見方ですが、このようなことを素朴に信じられるのは、ごく限られた信者だけでしょう。人間に寿命のあること、自分も同じように死ぬことは、分かっているながら、現実には自分だけを例外におく態度だとも言えます。「死に対する心構えのできていなかった者が、にわかに死に直面して、周章狼狽した場合に現れてくる心構えである」と述べ、多くの人々は、この程度の生死観で死んで行ったのだと結論づけております。

(2)の死後における生命の永存を信ずる見方というのは、肉体の死は認めるのですが、肉体とは独立していると思える魂や靈魂は永存し続けると信じるものです。これは、靈魂の存在を信ずる人々にとっては、生命の意味がいちじるしく広がり、死後に永遠なる生命がひらけますが、靈魂の存在を信じないものにとっては、何の意味もないものと言われる。

(3)は、自分の生命が(1)や(2)の考え方のように、直接に永存することを求めないで、自分の生命に代わる永遠な生命を見出し、それが永存することを望む考え方であります。その対象となるものは、彼によれば、「それに向かって心血を注ぎ、生命を打ち込めるものなら、何であってもかまわない」と言われております。心血を注ぐことが、そのような対象との結びつきには不可欠だと言うのです。芸道に精根を尽くした芸術家は、自分の生命にも代えがたいものをその作品の中に見出し、その作品が、何百年、何千年の後に評価されることを夢見ながら、自分の生命がその作品と共に滅びないことを夢想できます。またもっと視野を広げて、永遠なものとの結びつきを考えれば、永遠の生命である宇宙の靈のようなものとのつながりも考えることができます。確かに私たちは、そのようなものと比べれば、一点にすぎませんが、この一点は、極微ながら、全体の連鎖を構成する欠くことのできない一点だと解釈するわけです。この第三の見方については、とりたてた批判をしておりません。

(4)は現実の生活の中に、時間を超えた永遠を感じ取ろうとする見方です。これは一見すると(3)に極めてよく似た考え方のようにも思われますが、根本的な違いは、この見方には時間を超える体感的な直観が前提にされている点であります。そういう点では、これは、先の三つの見方と

も違っております。つまり先の三つの生死観は、生命を時間的に延長しようとしていましたが、この(4)は、生命の永存の問題を、体験の場面に置き換え、「永遠なる今」を実際の体験として把握しようとする立場です。一心不乱に何かをするその瞬間が永遠につながるというのです。現在が即ち永遠として感得されることを望むわけです。こうすれば死の煩いも克服されるというわけです。これは、一種の忘我状態ですから、日常生活の中にでも、自然とたわむれる間にでも、感じられるだろうと言います。彼は、これを、永遠感とも、超絶感とも、あるいはまた絶対感とも表現しております。死後の生を願わなくても、現在という刹那がそのまま永遠につながると考えれば、心の安らぎが得られることとなります。この見方についても、何ら批判らしいことは述べておりません。

結局、彼は、靈魂不滅も死後の生も信じないわけですから、(3)と(4)の見方を取ることになります。「生死観四態」は、次のような言葉で結ばれております。「現代人にとっては、人生を、いかに楽しく、豊かに、充実して生きるかが問題であること、死は、老年とともに、生の執着が弱まってから静かにやって来るので、その時まで、問題はそって残しておいてもよいこと、生の問題を強いて死と結びつけて解決する必要はなく、この人生を育み、深め、この中に永遠なる生命を把握することが大切なのであって、今後は、次第にこの両者の見方が優位になることが望まれる」と。

IV

しかしこの生死観は、癌告知後に微妙に変化しました。どのように変化したのでしょうか。

突然の死の宣告に、彼は、どうしても差し迫った生死観を求めざるをえなくなりました。靈魂不滅や死後の生を否定するという点では、特に変化はないのですが、告知以前には抱かれなかった心情や解釈に変化が認められます。それは、おおよそ四つあります。一つは、状況の変化です。癌告知によって、完全に以前とは異なった状況に追いやられました。死は老年になって、生の執着が弱まってから静かにやって来るとしていた暗黙の前提が、完全に覆されることとなります。二つ目は、新たな感情の萌芽です。それを彼は「生命飢餓状態」と表現しました。この種のせっぱ詰まった感情は新たなものです。三つ目は、死に対する新たな解釈。つまり死は実体ではないとする解釈です。四つ目は、死を<別れのとき>と見る解釈であります。

まず状況の変化と新たな感情の変化についてですが、この変化は、彼の生死観そのものに緊迫感を与えることとなります。『死を見つめる心』の「我が生死観」冒頭に、彼はこう記しています。

「生死観を語る場合には、二つの立場がある。第一の場合は、生死観を語るにあたって、自分自身にとっての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場である。しかし、もっと切実な緊迫したもう一つの立場がある。それは、自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合の生死観である。ギリギリの死の巖頭にたって、必死でつかもうとする自分の生死観である。この要素を加えると、人間の生死観は、何か質的にも別個のものになったかと思われるほど、第一の観念的な立場とは、異なってくる」。

老年までそっとしておけなくなった緊迫した状況の変化は、これまでの自分の生死観をも第一の生死観だとして断罪する思想を引出しております。そしてその感情の変化は、「生命飢餓状態」という危機迫る言葉で表現されました。生命飢餓状態とは、死との闘いがもはや観念的なものでなくなる状態。死の恐怖が、人間の生理的・心理的構造のあらゆる場所に、細胞の一つ一つにまでしみわたる状態だと言います。

そして彼は、生命飢餓状態にさいなまれながら、素手で死の前に立とうとするわけです。「死は実体ではない」といふ観点と、「別れの時」という想いはこのような状況下で考え出されました。第二の生死観には、せっぱ詰まった状況が不可欠なのです。

まず「死は実体ではない」という解釈ですが、これも彼の言葉を引用しましょう。

「生と死とは、ちょうど、光と闇との関係にある。物理的な自然現象としての暗闇というのは、それ自体が存在するのではない。光がないというだけのことである。光のない場所を暗闇という。人間にとって光にもひとしいものは、生命である。その生命のないところを人間は暗闇と感ずるのである。死の暗闇が実体ではないということは、理解は何でもないようであるが、実は私には大発見であった。これを裏返していえば、人間に実際に与えられているものは、現実の生命だけだということである」。

彼は、結局、生命だけが唯一存在し、死は実体としては存在しないという絶対的な生命肯定論を主張することになります。人間にとって何より大切なことは、この与えられた人生を、どうよく生きるかということに尽きると言うのです。私という意識をもった個人は死とともになくなる。死後の生など存在しない。とすれば、自分にとって残されているのは、現実のこの世界、この現実の人間世界、そして今、営んでいるこの命だけとなります。これは、恐ろしい事実ですが、この恐ろしい事実をごまかさずに意識すること、これが、彼の日常の宗教の出発点となりました。

しかし人間は、常によく生きることに努めながら、同時に死に処する心構えをも持ち続けなければなりません。その死に処する心構えの一つが、彼の言う<別れのとき>という新たな考え方であります。

「死というのは、人間にとって、大きな、全体的な<別れのとき>なのではないか。この考え方に目覚めてから、死を面と向かって眺めてみるができるようになった。<中略>この船出はどこへ行くか分からない船出である。自分の心を一杯にしているのは、いまいる人たちに別れを惜しむということであり、自分の生きてきた世界にうしろ髪がひかれるからこそ、最後まで気が違わないで死んでゆくことができるのではないか。死とはそういう別れかただ。私はこのように考えるようになった」と述べています。

自分の死後には、この世界もなくなるというのは錯覚で、死と無を同一視すべきではないと言うのです。死を、この世に別れを告げる時と考えれば、別れを告げるべき対象として、この世は存在することになります。そして残された人々ではなく、自分自身が、彼らの善さを思い、彼らの人生の素晴らしさを惜しむ気持ち、彼はそれを、「うしろ髪を引かれる」と表現したのでしょう。それによって彼は、全てに別れがあるように、いずれ訪れる決定的な別れの時に備えること、一期一会を大切に生きることを、いよいよ強く意識することになります。死ねば全てが無に帰するのではなく、<別れのとき>を告げるべき対象、つまり世界は存在すると言うわけです。おおよそこのような観点が新たに付け加えられました。

癌告知以前と以後との彼の生死観を全体として考えた場合、そこにどのような問題があるでしょうか。次にその点を考える必要があります。

問題点は大きく分けて二つあります。一つは、アウグスティヌス的時間論で、もう一つは、それから理論的に引出される現在がそのまま永遠につながるとする理論、であります。

アウグスティヌス的時間論とは、先に触れましたように、過去と未来を現在に関連づけて捉える

理論です。これは、時間の拡がりを精神の拡がりにおいて捉え、現在に永遠への接点を求める可能性を残した理論でした。この理論がこの場合、真に存在するのは現在のみという時間論にすり代わっております。過去は既に存在しないし、未来はまだ存在しません。これが、彼の場合、強い現実肯定となって現れました。現に在るものだけが在る。死は存在しない。つまり実体ではないというわけです。

確かに悲壮な体験に基づいた現実肯定は、人生を生きる上に何ものにも代えがたい心理を示しておりますし、残る人々への惜別の情を示した<別れのとき>という概念にも、身に迫る思いを感じますが、これで全てが解決できたと言えるのでしょうか。

例えば、<別れのとき>の実感を持たない幼い子供たち、仕事に生きがいを見出す必要のない少年たち、現在をただ過ぎ行く時間としてのみ生きる青年たち、彼らの場合はどうなのでしょう。またただこの世に存在したということだけにでも意味があるとしなければ、生まれてすぐ死ぬ命に何の意味があるのでしょうか。更に言えば、広く人間以外の生き物の死はどうなのかと問うこともできます。

また現在がそのまま永遠につながるという理論にも難点があります。それは、そもそもあらゆる生命が一つの出来事であって、その生命<出来事>が、時間と空間を生み出しているという科学上の事実を無視しております。現在という時空間に限られた時が、無限な時間、ないし時間を超えた永遠につながるとするのは、理論的には無理があります。だから彼はそれを体感と表現したわけですが。しかし生きることが一つの出来事であって、時空間そのものだとすれば、そのような枠の中でしか生きられない人間に、その枠を超えることはたとえ体感としても直観することは不可能です。人間には、時間を忘れることはできても、無時間的な永遠を直観することはできません。芸術家の一種の忘我状態は、単に時間を忘却しているだけで、その忘我状態が永遠につながると考えるのは錯覚に過ぎないように思えます。勿論、作品が永遠に残るといってもありません。彼は、現在が時間を超えた永遠に至る瞬間を目指していたようですが、それは、人間が人間でなくなることを望むことになるのではないのでしょうか。とすれば、生死観四態のうち、第四の類型は、理論的に問題があることになります。

それはまた処世訓としても、つまり生きる知恵としても、問題があります。<別れのとき>という概念がそうであったように、仕事に生きがいを見出した人や別れのときを自覚できた人、心を尽くしてある目標に身を打ち込むことのできた人たちにしか、現在即永遠の一瞬を持たないからです。しかしそのような生き方をしていない人たちの人生は、すべて無益なのではないのでしょうか。決して無益ではないはずですが。

人間の本質は、死を自覚することにあると言いました。しかしそれは、自覚できない全ての生が無意味であるということではありません。理論が妥当性を持つためには、あらゆる可能性を考慮する必要があります。

V

では次に、霊魂不滅や死後の生を認めず、しかもあらゆる生に生きた意味を与えられるような別の生死観を紹介することにしましょう。それをかりに、第五の生死観と呼んでおきます。この第五の生死観の大きな特徴は、過去が実在するという点にありました。はじめに時間論を取り上げた際

に、その実在性については述べておきました。それをここでもう一度、思い出して見てください。

現在が精神の場ではなく、出来事の場合だという解釈です。これによれば、過去も単なる記憶による回想ではなくなります。繰り返しになりますが、眼にしている太陽は、八分前に存在した太陽ですし、光の速度で約8分かかって地球に達しております。遙かに遠い星にいたっては、何千何万光年にもおよぶでしょう。それほど遠い事例でなくとも、眼にする景色や音なども、音速や光速に上限がある以上、それらが感じ取られるには、何秒、何万分の一秒のずれがあります。現在という場に過去がこのように浸透していると解釈してみますと、伝統的な過去の概念は一変するはずで、現在は、記憶が思い出される対象に依存するように、過去に依存しているのです。事実として実在するのは、過去の方であって現在ではないと言ってもよいでしょう。これを認識論的に表現すれば、知覚は公的ないし非人格的な記憶、記憶は私的ないし人格的な知覚と見るわけです。

現在とは、常に事実となりつつある過程に他なりません。これを厳密にとれば、今まさに出来事として存在しつつある<現在>というのは、単なる可能性であって、まだ事実として完結していないものなのです。例えば、ある人が現在、二者択一的状況におかれている場合、どちらでも選べる可能性があります。しかしその人が一方を選んだ瞬間に、他方の可能性はなくなり、一つだけが現実のものとなります。つまり選び取ると同時にそれは、過去となるのです。またここに本があるとしますと、この場所には、本が在るという事実から、本以外の他の一切の事物の可能性が排除されていると解釈できます。

現在は常に過去となって蓄積されて行く過程に他なりません<アウグスティヌスは、現在を消えつつあるものとして捉えましたが>。もし蓄積されず、記憶もされないとなれば、つまり次にどのような言葉を喋るかという可能性が、次々に事実となって過去の中に蓄えて行かなくては、人が喋る言葉はそのつど消えてなくなることとなります。記憶も、身近な出来事については知覚の一種なのです。過去の実在性はそのような記憶ないし知覚によって感じ取られるものと言えます。そのような知覚がなければ、話を最後まで聞いても何の意味も掴めないでしょう。

パースという哲学者は、過去のこのような性質について、「過去とは、なり終わった事実の総体である」とか「現実的なものは過去だけである」と述べました。これは、現在だけが現実的だという常識とは、つまり事実は現在にあって、目の前の感覚によって捉えられるものだけが事実だという認識とは、かなり異質なものです。記憶も一種の知覚であることをよく考えなければなりません。

このように過去や現在を捉えれば、一般に事実は現在において捉えられるという観点が根底から覆されることとなります。同時に、現在だけが存在するという時間論も否定されます。周囲の事物がすべて何らかの意味で過去に関係しているのだとすれば、つまり過去だけが事実だとすれば、過去を実在しないものとする時間論に根拠を置いた生死観も、根本から考え直す必要が出てくるでしょう。

とすれば、この第五の生死観の時間論から、死はどのように見られることになるのでしょうか。

次にこの問題を考えてみましょう。死後の生については、先に岸本博士も批判の対象とされた見方が二つありました。一つは、肉体か靈魂が天国や浄土などで、新たな経験ができるとする考え方。もう一つは、死ねば人格の一切が無に帰するとする考え方です。靈魂不滅にこだわる人は、前者を信じ、極端な合理主義者や極端な唯物論者は、後者を信じました。

この二つの見方は、しかし極端な考え方です。死後にも新たな生を求めることは、人間が有限で

ある事実を無視することになりますし、また死後には人格の一切が無に帰するというのは、最終的には人間の生きてきた人生に何の意味も持たせないニヒリズムを引き出すことにもなりかねません。確かに「別れのとき」という概念は、世界の存在を根拠づけましたが、自己の永存を根拠づけるものではありませんでした。

この二つの極端論を避けながら、なおかつ岸本博士とは異なった新たな理論を考えようとしたのが、過去の実在性という理論です。過去になることが事実になることだとすれば、死もまたそういう意味では一つの事実であります。死は決して無を意味しません。それは、一つの生という出来事の完結なのです。またそういう意味で完結された出来事には当然、一切変更を加えることはできません。既に過去となったものに変更が効かないのと同じです。時間は、こうして過去から現在へと一方向に流れながら、蓄積されて進んで行くわけです。

さて現在の出来事が全て可能性であって、過去の出来事の影響を受けて、あるいは決断されてはじめて事実として存在するのだとしますと、そのようなことは、外界の出来事だけでなく、自分自身の内部の出来事についても言えるでしょう。人格も過去の人格「出来事」に影響を受けているはずだし、いかなる人格もその時々を経験に決断を下してきたはずだからです。

もっとも自分にはいつでも同じ人格が備わっているということは、一般的にはあまり注意を払われることなく信じられております。誰も、日常生活において、この人格の同一性・不変性を否定する人はおりません。しかし人格の同一性が、単に漠然とした肉体や意識、ないし精神の同一性というだけでなく、身体をも含む全ての要素の厳密な同一性を意味するのだとすれば、どうでしょうか。乳児期や幼児期、あるいは少年期の自分と、今現在の自分とが全く同じだという人はいるでしょうか。体つきも大きくなり、体重も増え、顔つきもかなり変化しております。細胞は、絶えず新陳代謝を繰り返しているし、睫毛や眉毛などが伸びたまま一度も抜けないとすれば、妙なことになります。

老年になれば更にその変化は著しくなります。皮膚には皺ができ、しみが増え、脳は萎縮し、各臓器も機能に衰えを見せはじめます。ここまでくれば、もう誰もそのような同一性を認める人はいなくなるでしょう。

人格は、全く同一であり続けることもありませんが、また全く変化してしまうということもあります。もし万が一完全に変化してしまうのだとしますと、それは全くの別人だということになりますし、人格の意味をなさなくなります。問題は、その部分的な変化にあります。一体、その変化は何によってもたらされるのでしょうか。

時間が過去から現在に一方向に流れ、かつ現在が過去を蓄積して進んでいるとすれば、変化の原因は、過去にではなく可能性としてある現在に存在すると言えそうです。つまり時間が経過することとは、過去に新たな何かを加えられて行くことと考えられます。人格の同一性の例で言えば、この同一性は、内的には自分の過去の経験に現在の新たな経験が加えられることによって変化しますし、また外的には自分以外の人格によって影響を受けることで変化しするわけです。

一般には、人格は過去の経験の蓄積によって形成されているように思われがちですが、変化の原因が可能性としてある現在の経験にあるとすれば、人格を最終的に決定するものは、過去にではなく現在にあることになります。過去の自分がどうあれ、この今をどのように感じ、経験するかが、自分の人格を決定するわけです。殺人を犯した人間は、それ以前はどうあれ、その時点で殺人者の

刻印を押されるわけです。地球を一つの人格を持った生き物にたとえることが許されるなら、新たな一つの生命の誕生が、まさに地球に新たな一つの要素・事実を付け加えるのだと見ることができます。そしてこの一つの要素には、一つの新たな決断、一つの新たな創造が伴うわけです。

しかしこれを通常の見方に立って、過去が全く実在せず、ただ現在だけが実在するとすればどうでしょうか。移り行く現在だけが真に実在するものとすれば、時間は累積せず、人格も過去の経験に影響されながら連続的に変化し生成することも厳密にはなくなります。私の少年時代の自己は、既に消滅して実在しないだけでなく、たった今思い感じているこの自己を除けば、現在ではそのほぼ全てが消滅してしまっていることとなります。とすれば、死とは、単にそのたった今の自己だけの消滅であって、ほんの一瞬の生だけが消滅するにすぎなくなるでしょう。もしそれが死の意味だとすれば、その死には大した意味はないにちがいません。それにはきっと不死性を願うほどの重みもないでしょう。例えば、累積される時間を自ら経験しない動物、死の自覚を持たない動物の死は、ただこのような一瞬の生を奪うだけのように見えます。しかし人間の死に対する恐怖は、過去を含む一切の人格が、更には世界までもが一度に完全に無に帰するとする恐怖でありました。

人間が時間と空間において有限であるという事実は、変えることはできません。この事実を認めただ上で、死後の生はないとする信念を堅持しようとする場合、心の平安は、どこに見出されるべきなのでしょう。それが次に問題になります。しかしこの点については、既に何度も述べてきました。死後には一切が消滅するものではありません。これまでに生きてきた過去は、全て事実として実在するのです。死とは、完全な破壊、消滅ではなく、一つの出来事の完結であります。過去とは、なり終わった事実であると言いましたが、人生も広い意味ではそういう出来事の一つであります。ただその出来事は、一般の出来事と異なり、自らを意識できる出来事なのです。これは唯一無比なドラマと言ってよいでしょう。このドラマは最後まで見終わってこそ、影響を与えることができるのです。とすれば、たとえ死によっても、このようなドラマが実際に演じられたことを無にすることはできません。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」<ヨハネ12-24>と聖書にある通りです。

死が、あるドラマの最後の一幕、書物の最終章の最後の頁であると言えるなら、誕生は第一章の最初の頁でしょう。最初の頁のない書物はありませんが、最初の頁が存在すれば、その限りにおいて、それは一つの書物であると言ってよいのです。生まれてすぐ死ぬ生命にも、ささやかなドラマはあったはずで。とすれば、死の問題は、その書物の外にある問題ではなく、どこまでもその生という書物の最後の頁に関わる問題になります。その意味では、死は確かに実体ではありません。一つの生を綴った書物は破壊することはできませんし、色褪せさせることもできません。死は、その完結した頁をただそのまま固定するだけです。死によってその最後の頁に「終わり」と書き記されますが、その後、更にその書物に何かが追加されたり、削除されたりすることはありえないのです。私がこれまでの人生で獲得できなかったものは一切、現在の状態のままに生きる限り、今後も決して獲得される見込みはありません。これは、罰にも、報償にも適用されます。こういう意味では、天国で更に罰を受ける罪人はいないし、この世で不幸にあったからといって、それを天国で償うこともできないわけです。死によって全てがそのままに固定されるのですから。

かりにこれが事実であるのだとすれば、かなり冷酷な事実であるにちがいません。自分の人生の全てが取り返しのつかないまま一つの事実としてそのまま完全に残されるというのですから。

善人は善人のままに、悪人は悪人のままに、不幸は不幸のままに、文字通りそのまま人生を終えねばなりません。この冷酷な事実は、どのように受け止めればよいのでしょうか。

これにはおおよそ、三つの反応が考えられます。一つは、これまでに生きてきた人生のすべてを嫌悪する生き方です。もう一つは、自分の実際の姿を直視することなく、つまり自分が善人ではないという理由から、他の全ての人たちも善人などではないと決めつける自己中心的な人間として生きる生き方です。最後の一つは、自己と他人に対して同様な配慮ができるように人生を送る生き方です。できれば、汝の隣人を汝自身のように愛せるような人生が送られれば、それにまさる人生はないでしょう。

第一の受け止め方には、確かに大切な観点が示されてはいますが、それが極端な悲観主義を導くなら、生それ自体が目的だという観点に対する正当な配慮を欠くことになります。第二の受け止め方では、現実の姿を直視できないわけですから、当然、極端な利己主義、楽観主義を導くことになり、生の意味を見失うことにもなりかねません。自分に何の落度も、何の欠点もないと思える者などいないでしょう。これは動物に近い生き方です。自分が宇宙の中心でないことが出来るのは、おそらく人間だけでしょう。

しかし人格が先に見たように、部分的に変化するものだと考えれば、自己と他者との区別は、比較的曖昧になります。つまり過去の自己も一種の他者と見なせるわけですし、他者は逆に、そういう意味では自己と同じ要素を持っているとも言えるからです。これを認めると、純粋な利己主義は否応なく破綻します。純粋な利己主義では、他人はおろか過去の自分の人格をも正当に評価できなくなるからです。このように考えますと、先の事実は、第三の生き方を選んでこそ理想的な理に適った生き方になることが理解できます。西欧の伝統的な個人主義に根ざした利己主義というのも、これによって理論的に破綻させられるわけです。

死は、一つの生というドラマの完結であって、破壊や消滅ではありません。また演じられたドラマはどのようなものでも無にされることもありません。過去の実在性を認める限り、それはありえないことだからです。だからこそ、創造の場としての現在の生が、今まで以上に大切なものと感じられるのだと思われます。人格が過去の自分によって決定されたものではなく、現在の振舞いによって決定されて行くように、あらゆる出来事は創造の場である現在によって確定されて行くのです。こうして古いものが新しいものに取って代わられます。これが死の意味です。

死の問題が、生の問題に行き着くとすれば、現在を生きる緊張感は、単に死後の生が存在しないという理由からだけでなく、すべてがそのままに残されるという先の見方からも当然に出てくる自然な感情であります。確かにこの地球に新たな生命が誕生したこと、そのことだけでも、地球に新たな要素をもたらしております。人間以外の、死を自覚できないすべての生き物にも価値を見出すには、誕生がそのまま生の目的であることが必要でしょう。しかし現在が創造の場であるということ強くすれば、その意味が理解できる人間には、更にそれ以上の何かを残そうとする欲求も非常に強く出てきます。これは、自己が存在したということの意味が、ただ存在したことだけに尽きてほしくないという願いです。

人生が、諸行無常、無常迅速であることは、今さら言うまでもない事実です。しかしこれを実感できる人は稀でしょう。岸本博士のように不治の病に掛かるか、あるいは戦火が絶えない時代に生きて人々のように、特殊な状況におかれて初めて気づくのが人間の常であります。人間の悲しい性

です。

それを承知で、過去は実在するという観点から、生死観を問い直してきました。普段の日常生活で、絶えず死を思うことはありません。過去こそが事実であって、現在は可能性であるということなども、言われてみればそうかなと思う程度でしょうし、まして現在が創造の場であることを強く意識することは、稀でありましょう。気晴らしに時を過ごし、楽しく生きるのがおおよその人間の姿であります。人は、見たくないものを敢えて見ようとはしないものです。また事実、大方のことはそれで何とか凌げる場合が多いのです。しかしやはり死は間違いなくやってきます。

確かに、自分が後に続く生に、善し悪しは別にして、何らかの影響が与えられることは、有限な人間に将来への希望を与えます。このような希望に根ざした不滅性は、社会的な不滅性と呼ばれますが、そのもとには、人間の記憶力や社会の恒存が前提にされております。自分の人生は子供や家内に記憶されるし、孫たちにも記憶されるかもしれません。文書として残せば、更に時間を伸ばすことも可能でしょう。しかし人間の記憶力は余りにも弱いし、どのような社会も恒存したためしはないのです。またただ単に記憶されるというだけでなく、正確に自分という人間が理解されて記憶されるということまでをも含めると、更にそのような人間や社会の記憶は当てにならなくなります。身近にいる周囲の人間の間ですら、往々にして誤解を生むというのに、子孫に自分のことが正確に伝わるはずもありません。笑顔一つが、どれほどの誤解を生んだことでしょうか。

VI

それでは、一体、何に私たちは心の平安を求めればよいのでしょうか。それが、次の問題です。過去の一切が変えることのできない事実としてそのままに残されるというのが、過去の実在性でした。しかしただ事実が残されるというだけであるなら、その事実に大した意味はないでしょう。なぜなら、記憶するものがない事実について一体何の意味があると言うのでしょうか。記憶が記憶される対象くもの>を必要とするように、事実にも、それを記憶するものがが必要です。そのように考えてこそ事実の意味が出てくるのではないのでしょうか。とすれば、その事実、単に子孫に記憶されるような曖昧かつ不完全な知られかたではなく、一切を完全にくまなく記憶されることが当然望まれます。

何がそのような完全に知り、記憶するのでしょうか。それをここでは永遠の生命と表現しております。この永遠の生命には、目に見える肉体はありませんが、人格はあると考えて、知性や感情は備わっていると見なしてください。また伝統的な神は、全知全能と言われ、不可能なことが一切なく、全てを知りかつ行えるとされますが、この永遠の生命はそういう意味では全知全能ではありません。詳しいことはここでは言えませんが、要するにそれは、事実となった過去については、全てをくまなく完全に知ることはできるのですが、何らの事実にもなっていないような未来については、ほとんど知ることはできないのです。私たちにも明日のことが分からないように、この永遠の生命にも明日のことは分からないというわけです。そういうものが、私たちの過去をくまなく完璧に、記憶し、理解し、知るのです。

岸本博士の第三の生死観は、永遠の生命との一体感に将来を託する考え方でありました。彼は、結局、それが時間を延長したものに過ぎないと捉え、時間を超えた永遠を求めて第四の生死観を選択したかに見えます。それによって現在が真に永遠につながると考えたからです。しかしその永遠

は、単に時間を忘却したものでしかありませんでした。この第三の生死観に、過去の全てを取り込む先のような永遠の生命という存在を加えることにいたしましょう。

死後の生は存在しません。しかし過去は変わることなく実在し続けます。それが事実なら、それを永遠に記憶する生命も存在していいはずです。これが存在するという論証は省略します。そしてその生命に人格があるとすれば、更にはその生命に相応しい完璧な記憶力があるとすれば、そのようなものの記憶は、愚かな人間の一切の過去を完璧にするだけでなく、その愚かさをも許しうだけの慈愛も持ち合わせているでありましょう。許しと完璧な記憶力を持った永遠の生命が、自らのうちに、一切の我々の拙い生命を取り込んでくれるのです。

このように思えば、そしてもしそのようなものが存在するとすれば、私たちは、そのような永遠の生命に対する崇拜の念を感じずにはおられなくなります。宇宙が一個の生命であるなら、私たちはそれを構成するささやかな断片です。確かに、宇宙に比べれば取るに足りない断片ではありますが、この取るに足りない存在でも、現在を創造の場として生きる自由は与えられております。私たちの存在が、自由であるということは、その永遠の生命にとっても、私たちの明日の行動が予見できないということになればなりません。もし永遠の生命にでも予見できない要素があるとすれば、そのような創造を分かちを持った私たちは、できる限りその永遠の生命の記憶を善きものにする必要があるはずです。私たちがその永遠の生命を支える一つの要素なのですから。私たちの目指すべき目標は、結局、この永遠の生命を豊かにすることだと言えそうです。あえて不死性を求めなくても、私たちの過去を永遠に記憶してくれるものの存在を認め、他人と自分との厳密な区別を捨て、この生を豊かに生きようとすれば、それで十分ではないでしょうか。

しかしすべての過去が変更の効かないままに永遠に残されるという事実を受け入れるには、悲劇をも同時に受け入れる覚悟がなければなりません。悲劇的な人生の終幕は、偶然がもたらすものです。この地球という存在そのものすら偶然によるものと解釈できるなら、交通事故死は偶然によるものだし、癌に死ぬこともまた偶然です。人間が自由に生まれついているということ、それが、悲劇の根源なのです。

とは言え、宇宙の断片の痛みは、身体の細胞の痛みが身体そのものの痛みであるのと同様、全体の宇宙、つまり永遠の生命、の痛みであることをも理解せねばなりません。永遠の生命も、人間の身体が細胞の痛みを感じるように、私たちの痛みを感じているにちがいないからです。細胞が、身体の痛みや傷を癒すために最大の努力を払っているように、私たちも最大限の努力を払うべきでしょう。それが、有限かつ自由な、創造性を持った人間の務めでもあります。岸本博士は、惜別の情を、生きる勇気と力に変換しましたが、生きてきた過去が永遠の生命によって完全に記憶されるという認識には至りませんでした。

死後の生が存在しなくても、また靈魂の不死を願わなくても、永遠の生命は得られました。有限な生命という出来事が、全てを完璧に記憶する永遠の生命の内に取り込まれるのです。これによって、永遠の安らぎに近い意識を持つことができるのではないのでしょうか。確かにこれは、一種の概念論的生死観ですが、少なくとも私には、知性の納得できる合理的な生死観だと思われまます。心の平安がこれによって得られるなら、生命飢餓状態に陥る前に、このような理論の可能性を考えるべきでした。知性を大切に生きてきた岸本博士がこれを理解されていたなら、おそらく異なった人生観を持てたことでしょう。

時間は二度と戻りません。死後の世界は存在しません。死は消滅ではなく、一つの物語の完結です。しかし生きてきた過去は事実として永遠に実在します。そしてその過去が永遠の生命によって完全に記憶されるのです。現実を生きるというのは、その永遠の生命の記憶内容を豊かにすることなのです。

付記

この原稿は、アメリカの哲学者チャールズ・ハーツホーンの論文「時間、死、永遠の生命」を参考に、筆者が緩い論理で比較的自由にまとめたものである。なおこれは、宮崎女子短期大学で行われたニューライフ・女性アカデミー講座のために用意された。講演原稿に若干変更が加えられている。

[1994年12月10日受理]